

---

**柏市立未整理文書庫      整理班**

市場良子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

柏市立未整理文書庫 整理班

### 【Nコード】

N3255S

### 【作者名】

市場良子

### 【あらすじ】

やたら長い名称の施設で働くことになった合田ツグミは西芳寺という男に「エンチャントされた本の中」でいきなり殺されかける。だがそれも昔のこと。彼らは今、外務省のお仕事を片付けるべく、共に手を取り合って準備している・・・

~~~~~

電子データを紛失したので一生お蔵入りかと思われましたが、スキャナーではぱつとやっちゃいました。

念入りにチェックしていますが、それでも誤字があるかもしれません。発見されましたら報告お願いします。

現在「柏市立未整理文書庫 攻性対策班」を執筆しています。よろしければそちらもどうぞ

## 合田ツグミの初出勤 (前書き)

この物語はフィクションですので、  
実在の人物や団体とは一切関係  
ありません

## 合田ツグミの初出勤

およそ二週間弱の研修を終えて、私はやたら長い名称のなんとか整理班に所属されることになった。

「初めまして。本日より柏市立未整理文書庫整理班に配属される、合田ツグミです。よろしくお願ひします」そう言つて頭を下げる。

電話の応対から敬語の使い方まで。マクロの組み方からエンチャントの仕方まで。事務職のような訓練を私は真つ当にこなした。

研修直後は自宅待機を命じられた。配属先と簡単な説明が書かれた葉書が来ると、私は指示に従つて、午前八時半きっかりに柏市役所の近くにある柏市立文書保管所の裏に回つた。

「君はどつちだ？整理班か、それとも禁呪課か」  
葉書には裏の職員入口から中に入れと書いてあつた。だが、施設の裏に回り、スチール製の冷たい職員用の扉に手をかけたところで後ろからそうやって声をかけられた。

振り向くと、切れ長の目をした男が立っていた。  
長髪のセンター分けで、軟派な雰囲気である。だが、ダウンナー系の低い声と無表情に思わず日和つてしまひそうだ。

機先を制する。体育会系のノリで所属と名前を名乗り、頭を下げた。

数秒経つて頭を上げると、目の前に手を差し出されていた。何も考えずに握つた。目を瞑れば骸を触つているように錯覚してしまふ冷たさ。

「そうか、整理班か。よろしく。西芳寺と言います。さて、研修を終えた君には、まずオリエンテーションをこなして貰う。その後

は実地研修を兼ねた実務に入りたいと思う」

きびすを返し、私の眼前にある施設の正面に西芳寺が向かう。職員玄関から入らずに施設の入口に向かうことに疑問を覚えたが、これがオリエンテーションなのだろうと考える。

しかし、言葉遣いと無愛想な態度からして、あまり西芳寺は友好的ではなさそうだ。私は幸先の悪さを受けとめつつ西芳寺の後を追った。

薄い遮光ガラスの自動扉を前にして、西芳寺が止まる。その脇から向こう側に、受付と立ち机が見えた。始業前だからか、受け付けにはまだ人はいない。

西芳寺が立ち止まって、「仕事に関して、期待に沿っている内容かい」と言う。

「意外でした。名称とパンフレットを見る限り、公安系と気づく方はいないのではないでしょうか」素直に自分の思ったことを言ってみる。パンフレットには実務の内容が書かれておらず、一次試験、二次試験には体格調査等の公安特有のテストは無かった。面接や小論文でも「柏市民として云々」「貴万の考える社会貢献は云々」で微塵も公安に関する臭いを感じなかった。

「研修ではそれなりに優秀のようだったね」

「ありがとうございます。期待に応えられるよう頑張ります」

どうだろうか、と言って西芳寺は自動扉を手動で開けて私を中に入れた。少し不器用に扉を閉め、受付の方へ振り向くと、西芳寺は受付に向かつて歩いていった。どうだろうか、というのは受け答えとしてどうであろうか、と思いつながら後に続く。

西芳寺は受付カウンターの内部に入った。何やら探しているようだ、と思った西芳寺がこちらに振り向いた。腕を突き刺すように前へ。直後に銀色の物体が宙を舞って私に向かってきた。私の身体はそれに反応出来た。当たる前に空中で掴む。それは名札のプレートだった。すでに私の名前と所属が彫られている。胸のポケットに挿すと、自分が得も知れない何かに混じっていくような感覚を覚えた。

すると以前呼んだ本を連鎖で思い出した。それによると、欧米では個人がjoin（加わる）する形を取るが、日本では個人がmix（混じる）する形を取るそうだ。私は個を維持出来るだろうか。

受付の両脇に奥に向かう通路が見える。受付から出て、西芳寺が右の通路に消えていく。後を付ける途中で振り向いた。筆記台や椅子、来訪者へのパンフレットがないのはいかなものか。エントランスと言ってやりたいのだが、時間を置くと、仕事が無い弁護士事務所のように見える。

（毎日が激務で体裁を整える暇が無い、と解釈しておこうか）廊下を通り過ぎるでそこに出ると、一瞬興奮した。先のエントランスと違って市役所のような、いかにも「事務仕事やってます」という光景だ。それぞれの部署のカウンターが一つの台で繋がっている。始業前だが、随分と沢山人がいる。

人事課、整理課、総務課、外務課、財務課、営業課、、、それぞれが一種独特の雰囲気を伴い、柏市立未整理文書庫という施設を構成している。そして私も今日から、ここで一つのセルとして働くことになる。

ふと思いつき「西芳寺さん、整理班というのはどこの所属ですか？」と聞いてみる。

「ん？整理課所属の『実働部隊』だよ」  
西芳寺の返しは、私の顔を槌でぶん殴ったようなものだった。

それなりに勉学に励み、それなりに自身を磨いて、とある整理機構の面接を受けた。同様に様々な企業やNPOの採用情報に飛びついた。

柔らかく表現して、結果は最悪。おかげで進路指導室の常連となった。

大学など行きたくなかった。だが、高卒ではやれることも、機会も限られてくる。元よりフィールドは狭いのに、その中で『それな

り』という努力では壁の向こうを超えられるわけではない。それなのに、私は若者特有の気だるさによってこの修羅道を歩み始めた。

周りの連中が進路を決めていく中、私と言えば母と日々論争を繰り返す日々を送っていた。いっそのことモラトリアムを極めてやるうかと、憤激しながらもあちこちの採用要綱を読み進んでいる内、私が最優先と設定している「動機」を満たす職場を見つけた。

『柏市立未整理文書庫職員応募要項』

選択肢が無い状況で、希望をちらつかされた。

「耳が遠いようだね。整理課直属の部隊だよ。公安系とはこういうことだ」西芳寺はこちらを向いて歩き始めた。

（職員募集と言葉を広くしているから、どの課に配属されるかは限定されていないということだと思っていた。原因は学歴だろうか）  
「一応言っておくけど、ツグミ君は整理班から期待されているよ。さつきも言ったように、研修時の成績が中々優秀だったからね。だから希望通り、この班に配属してやったわけだ」

一瞬ためらって「希望通り、と仰いましたが、配属は特色を考慮して人事の方が決定すると研修時に担当の方が仰ってました」と言った。

「君の性癖」

は

「素行調査だ。公安系なんぞな。あらかたの情報は持っている」  
「・・・時期的に在学中にお調べになりましたね。それは良いとして、よく、目の前でそれを仰いますね」

「それに、実働部隊ということは、『エンチャントされた本』の

始末が業務内容ですよね。どこの機関が調査なされたのかは知りませんが、調査が確実なものだと思われる根拠はあるのでしょうか。私の役柄は適当ではないでしょうか」

唐突なそれに、反射的に対応。言い終わってから頭の足りない発言だったと思う。初日から軋轢を作りそうな発言は慎むべきだったとも考えた。

ふと、西芳寺が笑っていることに気づいた。無表情のようだが、若干口角が上がっているし、体全体から浮ついた波長が出ている。

「二階に行こう。整理班の職場はそこだ」

受付に戻り、入り口脇のエレベーターに乗る。

密室に二人きりは素行調査の件があつて嫌だったが、階段が清掃で使えなつたので我慢する。

「我々が所属する整理班は『エンチャントされた本』の処理がメインだが、激務だね。おかげで整頓が進んでいない」整頓の言葉に体が一瞬うづいたが、もう引込んだ。

「我々ですか」

「総務の人間とでも思ったかね。よろしくと言つたはずだけど」情報をもっているのが同じ部の人間というのは幸なのか不幸なのか。すぐに扉が開き、先に西芳寺が外に出る。つづいて私も出る。

左右に廊下が直線で続いている。階段は廊下の端にあるのが見えた。地図や案内を見ていないので詳しい構成はわからないが、扉の数から見ても、大きなスペースが広がっているのだろう。しかし、セキユリテイの面で不安だ。

廊下を少し歩く。第一書庫と彫つてあるプレートが脇にある扉の前で止まる。西芳寺が振り返った。

「君のご期待に添えられるだろう」西芳寺はそう言つて扉を開いて中に入つていった。私は後を続く。扉を開き、中に入る。その瞬間。網膜に景色が焼き付き、性的なそれに似た感覚が体の底から湧き上がってきた。

部屋の造りとしては大学の体育館ほどの大きなスペースだろうか。

ぱつと見では本棚に遮られて奥まで見えない。ずっと脇に目をやる  
と、管理室と銘を打ってる扉があり、笑いそうになった。

何を以って管理しているというのか。それぞれの本棚には乱雑に  
ファイルや、裸の状態で冊子が仕舞われており、整頓されていると  
は言い難い。棚の上にすら山積みになっている。それだけなら特別で  
もないだろうが、床に散らばっている書類、USBや、外付けH  
D。ケースの無い裸の状態のCDなんかも多数ある。化石と評され  
るフロッピーディスクもいくつも見受けられる。公共施設として、  
これはどうしても市民に見せたくない光景としてだ。

さらに驚くことに、床のこれらはなるべく踏みつけないようにす  
るといふ文化が全く生まれてなかったようだ。当然の様に西芳寺は  
床のほぼ全てを覆っているそれらを気にもせず、踏み付けながら奥  
へ進んで行った。

西芳寺の後に続く。無論、足元には気をつける。

とある棚の前で西芳寺は止まった。

棚に目をやる。仕舞われているファイルには『残留農薬検査等の  
結果報告』『柏市特定施設入居者生活介護の整備事業』とある。こ  
こ数年分の書類のようだ。ジャンルがバラバラなので、カテゴリー  
ズされずにただ放置されているだけか。

西芳寺が棚から紺色のファイルを私に寄越してきた。

「僕のサポートを務める人間の実力を早く知りたいと思うのは自  
然だろう。こいつを見てみる」考える暇もなく頂を開いた。

「・・・銀色の真実」

何か聞こえたような気がするが、意識が昏迷し、心と体を持って  
いかれた。

目覚める時、起きることを目的として目を開けようとするのか。

「目を開けよう」と思って目覚めるのか。いや、それは無い。なぜ  
なら意識が目覚めているからだ。

では、自然と目を開けた時に意識は解氷されるのか。  
違うだろう。目の不自由な人たちを圧する考えだそれは。  
いや、盲目の人たちには独特のシステムが備わっているのでは…  
目が開き、意識が発生してから…そんなことをしばらく考えてい  
た。

私は今、車の中にいて、運転席に座っている。

## 合田ツグミの受難

ガラスの向こうでは、夜が闊歩していた。少し身を乗り出すとフロントガラスの向こうに、アスファルトがある程度先まで続いて、途中で闇に覆われているのが見える。

次に脇を見る。暗くて何も見えない。

もう一度正面を向いてから、気づいた。ライトが付いている。

初めて乗る運転席は心地よかった。自分の身長は女子の中でもわりと大きいのだが、でも窮屈には感じられない。体格の大きい父がいつも、運転席を後ろにずらしているのが印象に残っているので、自然とそう考えた。

「まあ、この時代に女が窮屈に感じる車なんてあるわけないか」独り言。正直に言つて、状況が把握できずにいる。混乱しているのだ。多分、目が覚める前は柏市立文書保管庫にいたはずだ。そこで西芳寺という人物と会った。それで？私が見知らぬ車の中でまどろんでいることの説明は付くのか？

直前の記憶が珈琲に溶けていった砂糖のように不確かで、そのくせ存在感が大きい。慎重に動かなければいけない。勢い余って珈琲を全部飲んでみる・・・いったいどれくらいの砂糖が入っているのか知れたもんじゃない。

手の届く範囲を調べることにした。別に身体の何処かが縛り付けられているわけではない。それでも外に出る勇氣は湧いていない。何しろ少し前の記憶が全く思い出せないので、怖いのだ。まあ、少しずつ根を伸ばしていけばいい。

まず持ち物を確認してみた。すると、いつも持ち歩いている財布とか保険証といった物が無いことがわかる。結局、今の私は手ぶらのようなだった。

次に助手席に行動範囲を移してみた。身体を横向きにして片膝をシートに立てて体を伸ばす。

ダッシュボードの中をしてみる。正式には「グラブコンパートメント」とかいう名称のやつだ。ついでにセンターコンソールとかいう運転席と助手席の中間にあるやつも開けてみる。

何も無い。埃すら無く、新品同様の車みたいだ。言い換えると、普段は使われていない車ということになる。とても怪しいな。

助手席と運転席の間から高部座席を覗いてみる。

何も無い。非常に澄んだ湖みたいだ。魚すら住み着かない。

目に見える範囲で情報を獲得しようとして試みたものの、成果は芳しくない。一息ついてシートに深く身体を預けた。

不気味だ。今まで私は何をしてきたのだ。

西芳寺の顔が頭の中に浮かぶ。

すると自然に、考え方についての複数のアイデアが組み立てられた。

まず、なぜなのかを考えてみた。

覚えている範囲からして、犯罪に関わっていることは無さそうだが、他人の意志であることは間違いあるまい。なぜなら、私は運転免許取得のための講習を受けたことがない。

もちろん直前の記憶が無い以上、もっと過去の記憶も故障している可能性もある。だが、仮に私が実は免許証を持っていたとしても、だとすると持ち物が全て無くなっているのは間違いだ。

例えば、邪魔になるとか、緊急の場合とか、もしくは預けていたとか、とにかくいくらかでも財布や保険証が無い理由は思いつく。

だが、私は今運転席にいる。絶対に免許証だけは所持しなければいけない。

それなのに、免許証はない。これはつまり、私が自動車学校に行ったことのない表れで、かつ、他人の立里心でここにいることの証拠である。

「浅知恵・・・」

一応、筋道は付く。自分で納得出来る。だが、頭の早い人間はいくらでも反論を思いつくに違いない。反射的に、両膝を叩く。

「そう思うなら、大学に行けば良かったんじゃないかね自分・・・」  
痛覚が思考の脱線を矯正する。

次に、朝の状況と現在がどう繋がるかを考える。

記憶が確かなら、八時半から九時の間は西芳寺とオリエンテーション  
ヨンをしていた。第一書庫に入って、奥に消える西芳寺。

そこから先がない。

正面に意識を向ける。相変わらず、外は暗闇である。車のライト  
がじつと主張し続けている。

だとすると、十時間は経過しているのか？

その通りだとして、それで何が言えるの？

いくら考えても、幼稚な推論しか浮かんでこないみたい。

「これは浅知恵云々では無くて、着手するアプローチが違うみたい  
・・・」

さっと思いつくことを列挙する。今すぐドアを開ける。車を動か  
してみる。

これだな。アグレッシブに動いてみようか。

少し楽しみな気持ちで、私は車のキーがある場所に手を伸ばした。  
検閲に引つかからないようにはどのようなルートを選ぶべきか、  
というか聞きかじった知識でまともに運転が出来るのだろうか？

そんなことを思いながら、指を動かす。だが、キーを掴むことは  
出来なかった。

悪寒。非常に強い悪寒。

反射的に、身体が勝手にドアを開けようとする。

開かない。

やはり。

目をハンドル脇に写す。

鍵穴には何も刺さっていない。

一週間ほど前の記憶が溢れてきた。エンチャントの講師を勤めた  
三十代ほどの、化粧のきつい女の言葉。

「本の世界は作成者のイメージ、もしくは創造だ。例えば、クリエ

イトの仕方によっては数学の問題集でメルヘンな世界を埋め込むことが出来るだろう」

「セキュリティ、もしくは侵入者の排除のために世界は創造される。言い方を変えれば、その世界が持ち主の本領を100%発揮出来る環境になっている、ということだ」

「相手の土俵で勝負をしてみたいと思う馬鹿はいないよな？」

私は丹田を意識して呼吸を行った。これは現実の物ではない。恐らく西芳寺に騙されたのだろう。

車のドアが開かないなら、恐らく車の中にしか設計が為されていない、と目星をつける。次に私がすべきことは、とにかく車の外に出ること。

呼吸を意識することで身体の緊張を取り払った後、私は座席を倒して両膝を立て、運転席側の窓ガラスに向き合った。

ここを出たらどうするか、という考えが一瞬浮かんだが、それは霞となって霧散した。

その後も次々に響くノイズを頭から追っ払う。

そしてガラスに右手を付く。

腹に力を込め、手の甲の中心一点を見続ける。

少し経つと、全身を回るあらゆる血管が抱える熱を感じる。

それらの熱をつまぐ誘導し、手のひらに集める。

ある程度溜まったところで、一気に放熱する。

しばらくして、ガラスが流体となり手を撫でる感覚が伝わる。

だが感覚だけだ。窓ガラスには何も変化は無い。

熱割れを律儀に組み込むような奴はいない。

大事なのはこれからだ。

頭の全域を興奮と高熱が占めていくなかで、私は左手を反対に冷やしてやる。右手で熱を作り、手の先に集中させる。この動きと平行して少しずつ、少しずつ、左手の温度を下げ続ける。

上半身が茹で蛸のように熱くなる。頭がやられないよう慎重に高熱を腕へ誘導する。

時間経過と共に、手のひらを粘性の液体が流れる感覚がより大きくなる。

もう、やる。やろう。

より一層力を込めた。息を吸う。そして吐かない！この一瞬に願いを込めて、右手を引っ込める。

上半身を捻って、邪悪な意志を叩き壊すイメージで私は極低温の左手をガラスに打ち付けた。

その時私は思い描いていた。

左手を打ち付けると、拳に若干の衝撃が走る。

作用反作用の法則。だが、その痛みも気にならない。砕くことに成功。透明で硬質な窓は、大きくひびを走らせ、その綺麗な顔を曇らせる。鋭い音も伴う。打ち砕いた次の瞬間には、見えない外側の世界で、地面にガラスの破片が横たわるだろう。

左手は綺麗に、ひびすら許さずに貫通した。

意味がわからなかった。

本当に綺麗に、左の拳を通したのだ。

引っ込める。

そこに穴がある。遮る物のない、本物の風景が一箇所に写されている。

一応他の箇所を軽く叩く。

全く、変化の様子は無い。

音もなく、衝撃も無く、お上品に一箇所だけを希望が貫いた。

これをあと何度繰り返すのか、と私は一瞬思ったが、それはすぐに消えた。

はらわたが震える様な、もしくは嘔吐物を眺める様に悪意が私を貫いた。

咄嗟に、フロントガラスに顔をやる。

はるか遠くに、人影を確認した。

早く抜け出さねば危険だ、そう思い運転席のドアに顔を向けた。だが、すぐに戻した。視線を変えた瞬間に、隅で動きが見えたからだ。

じつと目を薄めて見る。どうやら私を指さしているようだ。

一つの考えが脳を駆け巡る。

そのアイディアに従い、私は座席を覆う様に身体をすぐに倒した。衝撃音。

背中に何かが複数、当たる。恐らくガラスだ。

咄嗟に言いかけた。「馬鹿やろう・・・女相手にチャカはじいてんじゃねえよ・・・！」予想が当たったことが、かなりの驚きだ。

身体を起こし、右手を運転席の窓に押しつける。

窓の全体に高熱が行き渡るように意識する。

左手の代わりに、背中の中間部分を冷却する。

正面の人影を睨む。

こちらを指してるのではない。こちらを狙い定めているのだとわかる。

そのポーズのまま近づいてくる。

若い男だ。案の定、不細工な玩具を手をしている。

彼が立ち止まった時、車の持つ特徴の一つ、加筆しなければいけないことがわかった。結構、車高が低い。

創造のエンチャントをかける。

空気中の音の伝搬速度、およそ340m/sを何倍も早く設定。

空気密度を可能な範囲で上げる。

緩衝と硬化のハイブリットを左手にエンチャントする。

フロントガラスから前方の空間へ、流線型誘導エンチャントをなるべく広範囲で設置。

これらを終わると同時に、車のバックファイアに良く似た音が聞こえた。

開いた左手を前に突き出す！流線型の誘導エンチャントによって、発射された弾丸は軌道を変更される。どこに向けて撃とうが、指定ポイントに集まる。

衝撃を認知した刹那、手を握りしめた。手に回転が伝わる。手首に向かう殺意を無理やりおとなくさせる。

閉じた掌を開く。そこにはメタリックシルバーの滑らかな銃弾が鎮座していた。

一息付く。いくら公営の施設とはいえ、現実の銃器が扱うエネルギーをそのまま再現出来るわけがない。

顔をあげる。窓ガラスは不愉快なことに、彼の放った銃弾でひびわれていた。

推力と感知のハイブリットを弾に込めて、彼へ投げ返した。一つ穴の空いたフロントガラスに、もう一つ穴が出来た。

すると。

冷たい、衝撃音がした。

何回も。

脳が認知するより早く、末端神経が拳を閉じらせて、ひび割れた前面に差し出した。

目を閉じ口をより閉じて、顔を下げた。拳に何かがめりこむ。回転と殺意を散らしながら。

腕の関節が曲げられそうになる。

右手をそのままに、座席に片膝付き、身体を浮かせ、勢いつけて拳を弾ごと振り下ろす。

凌いだ。

いつの間にか、車内が暗くなっている。違う。

彼が、無特徴の顔で無表情に、目の前に停んでいる。こともあるうか、私が目を閉じている内に、ボンネットの上に乗っていたよう

だ。

向けられた銃口は降りる気配無し。

銃を掴む手が、張り詰める。

何故か、咄嗟に浮かんだアイデアが身体を動かした。

私は大きく身を乗り出して高熱の右手で窓ガラスを一撃。ひびで曇った光景はきれいに片付いた。

すぐに左手を銃口の目の前に持っていく。衝撃と音。莫大なエネルギーに耐え切れない。方向を逸らすだけで精一杯だった。動きを止めずに疲労の少ない右手でそのまま銃を持つ彼の手を掴み落した。途端に大きな音が鼓膜を揺らす。もう一箇所、車の何処かに穴が空いたな。いや、構っている場合か。

そのまま足に勢い乗せて掴んだ手を引つ張り、彼の腕を大きなガラスの破片と一緒に車内へ入れる。舞台装置の一つである彼に、悲鳴を上げるような上等な人間の振りは出来ないようだ。ただ振り払おうとする意思と動きが手を通して伝わってくる。

空いている手で銃をねじ取る。

それは自然な動き。

すぐに左手で銃を構え、引き金に手をかけた。

だが、何も起こらない。

外へ出る彼の身体を見送った。

ボンネットに両膝ついた彼は片手を後ろに回した。

私は細かく息継ぎをしている。あまりの疲労と、期待に裏切られて何も出来ない。

正面に戻った彼の手は銃を掴んでいた。

それを確認すると、私は反応しない銃を彼に投げつけて死線を逸らす。

まだ諦めるな！

運転席の窓に手を付いた。

粘性の流体を感じる。高熱が保たれている。

まだ大丈夫だ。

最初のやり方に舵を切り替える。

温度を下げ続けた背中。

すぐに腰を曲げて車内に立つ。

勢いを付けて背中から運転席の窓ガラスに身を叩きつける。ガラスを破り、車の外へ二瞬の宙を浮く感覚。そのまま重力に従い地面へ。

落ちる。落ちる。落ちた。

「まあ、高卒だしこんなもんか。お疲れ様」

## 月光症候群及びシルバー事件

私はファイルを持ったまま座り込んでいた。頭の中は澄んでいるが、身体は倦怠感を伴っている。

非常に不愉快だった。

「これが整理課のお仕事でしょうか」口だけ動かして私は言った。  
「今の事象は特殊な部類に入るけどね。普段は機密保持のため書類をエンチャントして保管、年数の経過で術式を解くこともある。しかし、さつきは僕も焦ったな」

西芳寺が私のファイルを持っていない方の手を持って立ち上げる。しかし、今の一言が気になった。

「質問が。先ほどの本は、オリエンテーションのためにエンチャントされたものですよね」

「いや。僕も初めて見たファイルだ。この環境は特殊だね。職員の安全のために施設全体に「不読」がエンチャントされている。プロフィールや勤務年数、素質により読める文書は限られている。読めたらそのままで、読めないならもつと重要度の低いファイルを渡した」

「ですが、実際には状況及び経験次第で負かされることもあるのではないのでしょうか」

西芳寺は黙って入り口の方向に向かっていった。小走りで私は後を追う。部屋から出た。

「あー・・・そういうことね。ちょっとそこ待ってくれや」

エレベーターに向かう西芳寺とは逆の方向から、響きの良い男の声が聞こえた。目を寄越すと、初老の恰幅の良い男性が小走りですらに向かってくる。近づくほどに思う。体躯が非常によろしい。

「すまんね。キミがツグミさんだろう。私は河野と言います。よろしくお願ひします」愛想の良い顔だ。政治的駆け引きが上手いに違いない。

「始めまして・・・もしかして河野さんは今まで職員入り口にいらしていたので？」

「ああ・・・勘が良いね。その通り。本来なら私が色々教える立場だったんだが」そこで切って河野は西芳寺が消えていった方角に顔をやった。

振り返ると、ちょうどエレベーターの扉が閉まるのが見える。

「予定外の事が起きたが、どうやら何事もないようだし」

そこで私は頭を下げ、  
「河野さん、申し訳ありませんが、先ほど起きたことの仔細を報告するため、一度西芳寺さんとお話しさせていただけませんか」と言った。

顔を戻すと、河野は顎に手をやっていた。

「良いでしょう。私はここで待っています」

私は礼を言つて西芳寺の後を追った。

廊下端の階段を急いで下りる。一階に着いてエントランスに出る。

清掃の看板は無くなり、受け付けに人が見えた。

視界の隅でエレベーターが開くのを見る。進路を塞ぐように、前面へ走り跳ぶ。

空の箱だった。

現状を把握する前に、体が休みを必要とした。

深く息継ぎ。肩で吸って肩で吐く。

後ろから、地面の反響が聞こえた。

振り向くと西芳寺が居た。

「ごまかしのきかないこの仕事は離職率が高くてね。数年、僕のバックアップを担当していた高卒は、エンチャントされた本の世界でプロメテウスのようににカラスにすればまれて死んだ」

「だが、ここ最近自分の性格は丸くなってきたようだ。君が簡単に殉職しないよう、全力でサポートする次第だから、どうもよろしく頼むよ」

私は頭を深く下げた。気づくとそこには誰もいない。私は底知れない未来への期待と不安を伴って河野の元に戻った。

この歳で自宅警備員は嫌だなと思っている。それでも仕事を時々辞めたくなる。

初めて西芳寺に会ったあの日の、薄ら寒い言葉を前触れ無く思い出すために。

「ツグミ君、この本を読んでみないか」

「ついこないだ、貴方のその言葉が原因で総務課に迷惑をかけて、公安部を動かしたのですが」

「あれは迂闊だったな。とにかく、ほら」

私は恐る恐る受け取って身長に中身を見た。汗の存在を意識する。心拍数が上がっていく。私は項を数枚開いた後、つつけんどんに返した。

「どうしたの」

「この本、中身が素数変換されており尚且つ、追跡のエンチャントと高度な思考のプログラムが組みれています。同じ整理班の方から聞いた事があるのですが、これはいわゆる特A級の禁呪ではないでしょうか」はなから読ませる気は無かったということだ。私をからかおうとしたらしい。

「この施設に掛けられている不読の術式は民間に発注して作らせた、と聞いています。国の施設とはいえ、対応年数もあと少しで過ぎますし、読めてしまえる可能性を考えるべきです」恐ろしい話だが、予算の見直してバックアップとプロテクトが不十分になっている。

「あー、わかったわかった。とりあえず今日の特別業務の準備だ」私が返した禁呪の本を目もくれずに適当な本棚に突っ込む。セキユリテイの面で非常に心配だ。第一書庫から出て真向かいの部屋に移動する。

そこは整理班が事務仕事を行う部屋なのだが、この部屋も床に足場は無く、職員はさまざま書類を踏みつけながら仕事をする。

「本日の流れを確認しようか。ツグミ君」西芳寺がデスクに座って

から、そう話しかけてきた。

「午後13時よりお客様がお見えになるので、それまでに借りておいた公民館の部屋の準備をしす。その後は事前に打ち合わせた通りに、特別業務に入ります」自分の机上を整頓しながら、目も合わせずに私は言った。

その後に行くつか来訪者の身元や目的の確認を取ってから、私たちは現場に向かった。

午前を全て特別業務の準備に費やし、昼食に入った。総務課の同期と一緒に食事を摂っていると、西芳寺が私を呼んでいるとの報告が来た。

託けの言う通り、呼び出し先の公民館に向かう。

窓口に聞くと、西芳寺はおよそ10分前に来たようだ。

階段を上がり、広間から大きく伸びている通路を駆けて扉の前に立つ。扉をノックすると、西芳寺の声がした。

「ツグミ君、待機。・・・いや、面白そうだ。やっぱり来たまえ」

扉を開けると、部屋の真ん中で西芳寺がパイプ椅子に足を交差させて座っていた。窓にはカーテンがかけられているが、それでも部屋の明るさとしては十分だ。

「ツグミ君、今何か、感じないかい」

「特に何もありませんが」部屋を見回してみるが、気になる箇所は見当たらない。

午前中はこの部屋の準備に費やした。

風景に変わりはない。

この空間を占める不干渉のエンチャントも異常は無い。

西芳寺は小難しい顔をして何かを考えているようだったが、意を決したようで私に顔を向けた。

「ツグミ君、靴を舐めてくれ」西芳寺の顔はアルカイクスマイルに輝いていた。

私は机を交わしながら西芳寺に近づき、ひざまずく。靴を一足、手に持って顔を近づけた。

口が触れようとする瞬間、靴は遠のいた。

勢いを伴って、私のみぞおちに吸い込まれる西芳寺の靴。

あまりの痛さに悶絶している私の傍らで、西芳寺は何事か眩いていた。しばらくして痛みが引いてきた時、部屋全体から何かが飛散したような雰囲気を感じ取った。

「野暮用があつて昼食をここで取るうとしたのだが、奴隷のエンチヤントが部屋にかかっていることに気がついた。効果は先ほどの通りだ。普通の地方役人なら騙せただろうが、僕は強いぞ」

「あの・・・術がかかつていたなら・・・解いて下さい」西芳寺から喰らった一撃が強力すぎて息が絶え絶えになり、思考能力が落ちている。

「ちょっとツグミ君のそういう部分が見たかった。最近は何特別業務ばかりでツグミ君欲求不満なんじゃ」

「馬鹿なことを・・・仰らずに、てか謝ってください」立ち上がり服装を整える。スーツからごみを払いのけ、西芳寺と向き合った。つもりだった。

私の目の前に背中を向けた男が二人いた。後ろからだとよくわからない。

「見苦しいところを見せてしまったな。公安の犬共。こないだのことで迷惑をかけた」

右が「特A級の式を読む地方役人がたらめな人物では、当然監視の必要がある」と言う。

「それでわざわざここにいらっしゃるのですか」恥を押し隠して私はそう言った。背中に目が付いていても不思議ではない。

左が「今日、貴方達が担当する業務に同行することを上と相談し

て決定しました。目的は機密事項です」と言う。

「それはわかったが、依頼主の外務省条約審議部に」

「納得していただきました」西芳寺の言葉を遮って左が言う。

「ではさっそく特別業務に取り掛かるぞ。概要は我々も把握している」右が言った。

正面から見ると、二人は顔以外全く同じだった。片方はレンズが茶色のサングラスをかけ、もう片方は全く特徴の無い顔だった。サングラスは坂上、特徴なしは華山と自己紹介した。きつと坂上がサングラスを外したら、華山との見分けがつかないに違いない。

特別業務開始を宣言した後、二人は四隅に何やらエンチャントしている。私は作業の傍らにそっと窺ってみる。なるほど、最近の機密系魔道は随分と進んでいるらしい。呪文のソースを保管したUSBメモリでエンチャントしている。コスト削減という奴か。

西芳寺は部屋の中央で大人しく座ったままだ。

それとなく準備は済ませたのか聞いてみると、「部屋に善からぬ術がかかっていたのだ。何が起きてもいいよう君が来る前に準備は整っている」と西芳寺は言う。見る、と指さす床では無色のワイヤーが絡まって地を這っていた。西芳寺曰く、未整理文書庫の攻性対策班が標準で使用している迎撃の呪文と調査のエンチャントのハイブリッドが可視化したものらしい。恐らく、あといくつかは何らかの呪文が潜んでいるだろう。

「保険をかけた。そろそろ行くぞ」坂上が言った。気になったのでどういふものか聞くと、しぶしぶだが、次のように教えてくれた。

簡単に言うと危険が迫った時、部屋の魔と付くもの全てを飛散させて強制的に作業を中断させるらしい。

説明を黙って聞いていたらしい西芳寺が口を挟んだ。「今しがた調べ終わったが、この本には学習のエンチャントがかけられている。失敗も中断も許されない」

「調べ終わった？他にわかったことはありますか」と華山が聞くと、西芳寺は「それ以上はさっぱり。何せ外務省の文書だからな。防壁

が中々やる」と言った。

「よし、これより処理を行う」西芳寺の声で体が引き締まる。

可動式の机を端に寄せて部屋の中央にある本を囲んだ。いよいよ始まる。

私が本を開くと、坂上は短い声を上げた。

「おい。君が処理をするのか？逆だろう」

「いいえ。基本的に私がメインで処理します。普段から西芳寺さんには私のサポート役を勤めて頂いています」殺されるのは御免ですから、と小さく付け足すと、何やら納得してくれたようだ。

彼の素行を十分知っていなければ公安ではない。

「集中しろ」西芳寺の声で全員の視線が本に注がれた。

『今、探索者がとある部屋にいる。部屋の大きさや構造は考えても、考えなくても別に構わない。貴方が今為すべき事は、この部屋から抜け出す術を彼に教えることだ』

## リアル脱出ゲームを演出する本と公安とサドとマソ

本は中央から裂けている。飾りの本や金属で出来た本のように、読むことを目的としない。

「では、ツグミさんの実力を拝見します」華山の言った言葉で私の気分は高く張りつめた。

「この本は私たちの発言に対して反応する類のようですね。この文はどうやら最初からあるようなので、処理は私たちが事態を把握することから始まるでしょう」

「もう全員わかってるだろう」西芳寺の声に頷く。

「その部屋の扉はどうなっていますか」

私が本に向けてそう言った瞬間に、一見して何も変わらないこの部屋で、世界が反転して現実が彼岸に追いやられた。

肌突き刺さるような邪な意志。本が作動したのだ。これから私たちは命をかけてこの殺意を払いのけなければいけない。

雰囲気というハンドルを思い切り引いたような部屋の様子に、三人の反応はそれぞれ違った。西芳寺からは好奇心が発散されており、それを見る坂上からは混じり気のある期待感が感じ取れる。華山は何も感じていないようで、微かに西芳寺への畏怖を放っている。

「植物の匂いがする。壁だ」西芳寺が言う。壁に目をやると、黒い筋のようなものが見えた。

天井や床にもわずかばかり走っている。

西芳寺が近づく。「枝だ。柳の枝っ規則正しく組まれて壁に引っ付いている。面倒だな」何が面倒なのか。そのことを聞くと西芳寺はこう答えた。

「この状況はウィッカーマンだろう。ドルイド教の焼き殺す人身御

供という奴だな。放火を演出するエンチャントは色々面倒なんだよ」

そんな西芳寺の言葉にかまわず、「早く処理しろ」と坂上が言う。本に目をやると文が変わっていた。

『扉があつた』

三人がこちらを見る。ちよつとしたジャブを喰らわす。「部屋に扉がある。だから何なのでしょうか。丁寧に鍵を探して開けるといいのでしょうか。床を掘りましょう。壁に手をかけて乗り越えましょう。身近にあるもの、もしくは自らの身体で壁を、扉を壊しましょう」

『床、壁、扉は強度が高いようで壊せない。天井があるので乗り越えも出来ない』

「まあ想定の内観ですね」私は公安部から何か言われる前に言っちゃった。

新しい文は自分が出口の無い金属の箱に閉じこめられる妄想を喚起した。だが、私の頭は光りを指し示してくれる。

「部屋にあるものを知らせなさい」

『寝具や排泄器具等の他に大きな棺桶のような箱がある。中を見て

みると、ハンマー、コーラン、細長い高飛びの棒がある。光源は天井にいくつかが蛍光灯が設置されているのがあるだけだ」

「変てこな」「趣味の悪い」「意味がわからない」

三人の反応が面白い。

「だが」と西芳寺が言う。「新しい要素の出現は興奮するな」

余裕を感じられる西芳寺の対応に頼もしく思う。

私はこの要素をどう使うか頭を回転させ始めた。

「ハンマーがあるということは何かを壊せという隠喩なのでしょう。強度が高いらしい壁や扉は除いて、光源以外の物を全部ぶっ壊しますか」

私の提案に三人は乗ってくれた。

『寝具や排泄器具の破壊を試みた。寝具や排泄器具からは何も出てこなかったが、寝具の下から赤い薔薇の鍵を見つけた』

「まさか。これが外務省の条約審議部が持ってきた本かよ」坂上が上機嫌に言う。油断しないことを柔らかく言うと、華山も一緒に坂上をたしなめた。

『扉の鍵にこれは合わないようだ』

ふと気になって扉の詳しい形状を尋ねた。すると鍵穴が二つあることがわかった。さらに、一般的な扉とは違うようで銀行の貸し金庫のような扉らしい。華山が申し訳なさそうにこちらを見る。相方

が軽くて申し訳ないと言っているようだ。

これからどうするか考えている内に、頭を上げて部屋を俯瞰する形になっていた。公安部の二人は何やら考えているようで、西芳寺は本をじつと見ている。部屋を巻ぐ枝は段々と存在感を増しているようだ。少し身体をずらす。すると足に枝がぶつかった。

「そういえば西芳寺さん、どうして私たちの元に外務省が」

「公安の目の前でそれを言うか」坂上の言葉にはからかうようなニヤンスが含まれていた。

「確かに。その話は後。目の前に集中しろ」その通りだった。油断はあつてはならない。

しかし、外務省の文書で赤い薔薇ね。今度は白い薔薇を探すのかな、と坂上が眩く。イギリスの薔薇戦争だったか。確か赤薔薇を背負う貴族と白薔薇を背負う貴族が争った戦争の筈だ。ケルト民族のドルイド教。イギリス。いくつかのキーワードでヨーロッパを意識する。さすが外務省の扱う文書だな。

こういうのはどうでしょう、と華山が言った。

「特別な扉しか外への道はなく、窓があるとの描写もない。外とは完全に道を断っているなら、酸素がいずれ足りなくなるはずで、本は定期的にその旨を告げなくてはいけません。ですが、今のところそのような忠告はありません。これはつまり外気を取り入れる穴があるか」と

『隅に穴があった。覗いてみると手の届きそうにない所に何かある』

「さすが。穴は物ではないから、聞かれない限り本も隠し通せる」まるで本に意思があるような言い方だった。私の心情を読み取ったのか、学習のエンチャントが掛かっているから、と西芳寺は言った。「これはもう棒を使うしかないですね」私がそう言うと、うまく行

くといいなと坂上が返してくれた。

『取り出すことに成功。白い薔薇の鍵だ』

「詰める。そろそろ火を点かれてもおかしくはないぞ」確かに、部屋の様子は当初と明らかに違って来た。窓に枝が張り付き、明るさが減っている。床や天井にも這っている。

形成される籠。非常に危うい。

「二つの鍵でとびらを開ける」

『鍵が二つとも合わない』

嫌な空気が流れ出した。そろそろ油の匂いがしてもいい。何を間違っていたのだろうか。思わず舌打ちをしてしまう。

見つけた鍵が無関係とは思えない。そう言う西芳寺の言葉に頷く。

二つの鍵。薔薇戦争。大英帝国。

「鍵は統合するべきではないでしょうか。根拠としては薄いですが、いくつかのキーワードがそう意図しているように思えます」

『二つの鍵はぴたりとはまった。一つの鍵として有効なようだ』

悔っていました。と華山が言った。

あと鍵を一つ。畢山の言ったことはわざと忘れる。私の頭は出口を見つけようと静かに興奮してくる。他の三人はどうだろうか。

「使われていない道具としてコーランがあったな。これは何だろうか。内容は読めるか」馬鹿な質問を、と思ったが西芳寺のことだから何か考えがあるのだろうと思ひ直す。

『中身は読めない。言語の問題ではない。ただ、とにかく、読めない』

何かわかったか西芳寺に聞く。すると「コーランはシンボルのよ  
うなもの、すなわち別の意味を持つのではないかと思った。予想通  
り、読むことを前提にしていないうようだ」なるほど、だとすると知  
識が必要となってくる。

教祖はムハンマド云々、発生と聖地は7世紀始めでメツカが云々、  
分岐はシーア派とスンニ派云々と知識の確認と周知を行ったところ  
で坂上が冗談を飛ばした。「右手で飯を食うのも重要かもな」

思わず口元が軽くなる。正直助かった。本来ならふざけている場  
合ではないのだが、いつ儀式が始まるのか、と思うとストレスが凄  
まじいのだ。

部屋に関係のありそうな舞台装置はありましたか、と華山が間も  
なく言う。芳しくない状況だ。西芳寺に私は顔を向けた。いつにな  
く真剣な面持ちだ。

同時に、奇妙なものを見つけた。

「西芳寺さん、左手のそれは」

言い終わった瞬間。床から、四隅から、西芳寺のワイヤーが飛ん  
でくるのがわかった。綺麗に放物線を描いて持ち主に向かう。奇妙  
なそれは身を交わすが、次々と飛んでくるワイヤーに対応出来なく  
なる。段々と動きを封じられ、私たちの目前に吊るされた。

「おい…この本は欧州系だろう。どうして式神がここにあるんだ」  
坂上はそう言って警戒心を表す。椅子から思わず立ち上がってしまった。

それは人の形をした紙切れだった。式神。研究され尽くされた魔道。

だが、テンプレートをいくつか組み合わせたものを式神に乗せる方式が発見されて、近年価値の見直しがされているらしい。利点はとにかく燃費が良いことに尽きる。使用者が媒体に力を継続して与えることが出来ない状況でこれは使える。早い話、遠距離攻撃、諜報活動、遠隔操作に関して特化していると聞く。ここに式神があるその意味は何だろうか。

思考を回す暇もなく私の身体は粘りつく匂いを感じた。そろそろウィツカーマンの始まりだと理解する。

「手がかりは二つ。式神とコーラン。この式神だけど、攻撃を行うエンチャントはかかっていない。その代わり、解析とデバッグのプログラムが組まれている。若干思考する機能もあるようだ。だが、この程度の魔力では、処理に当たる人間を解析することなんて出来ないはずだ」西芳寺が言う。

式神を絡めたワイヤーは、少しずつ緩んでいったのに私は気が付いた。注意を促すと、西芳寺はあえて行っていると言った。

「放っておくと何をするのか興味がある。君たちもいるしこの式神には力がない。大丈夫だ」

自由に気が付いた式神は、それが仮初めと知らずにか、床を這い回り、終いには西芳寺の左手にぴたりとくっついた。

「何なんだ？何が目的だ…」西芳寺が言う。

そこで坂上が声を上げた。「時間を気にしてくれ。あと数分もしないうちに部屋が丸焦げになるかもしれないんだぞ」

いったん式神は置くことにした。攻撃を仕掛けてくるわけでもない、そのまま西芳寺の左手にくっついている。

「でもある程度は大丈夫そうだ。今気付いたのだが、このオイルは

灯油だと思う。揮発性が低いから、火をつけられても時間はまだあるというわけだ」坂上がそう言うが、フォーローになっているのかそれは。

そういえば、と華山が切り出す。「光源は天井の蛍光灯ですよ。隅にあつた穴の、それも手の届かない所までなぜ光が届いたのでしょうか」それも後でいいだろう、コーランが先だ。と西芳寺が言う。若干声に焦りが見られたが、今は気にしないでいよう。

「問題は、部屋にそれらしき舞台装置がないということだ。もう一度部屋の様子を探りながら取っ掛かりを見つけてぞ」その西芳寺の声は、ラストスパートの合図だった。

幾たびも本に質問や要求をぶつける。部屋の大きさはどの程度だ？匂いはあるのか？壊した物を調べてみる。だが何も手がかりは得られず、段々と油の匂いが強くなるのが、一層気を焦らせた。火が付いたらまず煙が心配だな、と坂上が漏らす。

「ツグミさん、先ほどから顔色が優れないように見受けられますが」華山が私を心配してくれているようだ。

「ツグミ君・・・何かとつかかりでもあるのか？」

「え・・・？」

西芳寺の言う通りだった。具合が悪いのではない。だが、何故西芳寺はわかったのか。そう思うと、察したように西芳寺は言った。

「君がここに来てからどれくらいになる？僕だって職場の人間に興味くらい持つ」

「はあ・・・」

よくわからない。

考えをまとめて、意を決し、ぎりぎりで動くパソコンの様にアウ  
トプットする。「そうです、はい……。あの、取っ掛かりを見つ  
けました」

## ウィツカーマンであることの意味がない

三人がこちらを注視してくる。これで失敗しては目も当てられない。

「推定の域を越えませんが、式神の存在がポイントです。欧州系のこの本に、式神は無いはずですから。言いづらいのですが」そこで区切る。柔らかい表現を探すが、時間がないので止むを得ない。

「条約審議部はこの本の処理に失敗したのではないでしょうか。よく考えてみれば当然の様に、私たちの元にわざわざ外務省が来るのは妙です。他の機関に依頼しなかったのは、外務省としての面子と、地方役人程度なら簡単に口を塞げられる、といった所でしょうか」自分で言っておいて気分が激昂する。舐められたものだと思う。つていと、渋い顔をしていた西芳寺が顔を崩し「それもあるだろうが、私怨が大半だ」と言う。どういう意味なのかわからないが、優先順位というものがある。

まずは目の前の問題。

「それで結論は」坂上が先を急かす。

「とにかく、式神は条約審議部が処理の途中に放ったもので、式神に思考する力があつたのが重要な点です。式神に備わっていたデバツクと解析の力。式神は諜報の成果を私たちに知らせようとしたのではないのでしょうか。大英帝国、コーラン、左手のタブー、学習し、情報を意図的に隠す本。そして、左手に執着する式神。これら全ての要素を含めて考えてみましょう」

言い切ってから西芳寺の左手に目をやる。式神が相変わらず手の甲に張り付いている。なぜか労わってやりたくなつた。深く息を吐いて、たくさん吸う。心地よい充足感があつた。西芳寺はなるほど、と言い、坂上は良くやったと言ってくれる。終らせましょう、と華山が言う。

「探索者の左手には何がある」  
『鍵があつた』

熱風を感じた。急激に高くなる室温に妙な感情を揺さぶられた。だがもう遅い。四人の声が重なった。

「扉を二つの鍵で開けて出る」

世界が反転し、此岸に戻って来る事が出来た。

だるさを感じながらも、本を手に取るうとする。だが、西芳寺が先にかつさらっていつてしまった。

「本の処理は正常に・・・？」

「ああ・・・ちゃんと処理されているよ」

「それでは失礼します。西芳寺さん、ツグミさん」

「それじゃあな。もう会うことはないだろう」

公安は足早に最小限の挨拶をして立ち去った。というか坂上は何なんだ。

その後、やる事が出来たと言った西芳寺は、出張届けを残して消えた。式神はいつのまにか無くなっていた。

数日経って第三次報告を済ませた時、西芳寺が帰ってきた。職場の方々はおるか、別の部署の人間にすら帰ってこなくていいと思われていた人間は、あの時の混乱を一切纏わずに余裕綽々としていた。

市役所近くの公民館にある喫茶店で昼食を誘っていくつか世間話のような雑談をしてから、気になっていたことを尋ねた。

「前の特別業務ですが、本の内容で不備がありましたね。あれについてですが」

「条約審議部の攻め方を学んで防壁を強化したんじゃないかな。ただ、自己思考のエンチャントには限界がある。故に中途半端な構成になっていたのだろう」べらべらと喋る西芳寺に半端な感情は無さそうだった。

「そういえばあの時には言えなかったんだが」

「何でしょうか」

「式神にはバックドアを設置するエンチャントがかかっていた」

「え……」

「知ってしまえば公安も動くかもしれない……そうしたら本格的に僕は外務省から睨まれるからね。あの時には伏せておいたよ」

「なるほど……」

バックドア、か……

設置してしまえば、後は使い手がそこから魔力を供給出来る。遠距離操作に長けた者が使うエンチャントとしてはこの上無く適切で、かつ危険だ。いったん設置してしまえば、後は一方的に事を行える。「それから、外務省と軋礫があるそうですが」言葉を濁すだろうと思っていたのだが、意外にも西芳寺は「同期をね」と言った。

「昔殺しかけたことがあった。本の処理をどうするか迷っていたうちに僕に任せようと思いついたのだろう。成功すれば失敗を隠せて御の字。失敗しても僕を殺せるから御の字。ただ、公安が動くとは思っていなかっただろうな」説明を聞いて私は屈辱の場面を思い出した。部屋に奴隷のエンチャントが掛かっていた理由がそれか。

だが、西芳寺はとても強い。そして公安が動いたので本は外務省から離れた。

その同期の方とは連絡は取っているのですか、と尋ねた後、すぐにまずいことを聞いたと思った。私はここ数日の出張の理由をうつ

すらと予感していたのに。西芳寺はアルカイツクスマイルで私に微笑みかけた。

「さっき殺してきたばかりだ」

それでも昼食の味が落ちる事は無い。余計な情報を知ることですくが増えるから闘きたくなかっただけ。そういう世界だから。ここは。

財布に心の中で経済状況を尋ね、甘味を頼むかどうか迷う。その時、西芳寺が店員に呼びかけるのを聞いた。「すいませーん。注文良いですかー？」

まあ、いいや、私も食べよう。いつ死ぬかわからない世界だから。

「人を一人、しかもうちの畑の者を殺しておいて暢気だな」

殺気。

は。

なんだ？

いつの間にか、テーブルの上に見たことのある物が宙を舞っていた。

式神だった。

ふいに、バックドアという言葉が浮かんだが、次の瞬間に消え去った。

まず、西芳寺が座っていたソファごと吹っ飛んだ。

次に、風景が反転した。今度は私が飛んだのだろう。

地面に叩きつけられた衝撃に思わず胃の中をアウトしそうになる。外務省の報復とは、なかなか厳しいじゃないか。ただそれだけ思うだけでも、私は精一杯で、西芳寺のこと、式神のこと、これからのこと、それらは全く考えられなかった。



## 後書き 小説

あとがき

この作品は去年の学校行事に出展したものです。  
かなり手を加えています。

当初では締め切りが厳しかったので、ツグミさんの初出勤での勝負が省略されてました。ちなみにですが、シルバー事件オープンニングのロケーションを模したつもりでした。アレ。

また、最後で合田ツグミさんには死んでももらいました。西芳寺もしくは公安の暗殺のとはっちりということ。

ですが、偽敬語でマゾで行動出来る女の子のキャラは動かしやすいのと、愛着があつたので・・・

「これから死ぬかもしれない」ということで落ちつかせました。

続編として県立非公認軍謀報課禁呪班とか書いてみた時期もありましたが、どう考えても中二病の延長です。

千葉県が誘致した企業の重鎮暗殺発生、すでに侵攻している価格カルテルの操作と平行して『西芳寺が』背後を洗うというあらすじで、なんとか頑張ってみたのですが・・・無理でした。息してないよ私。

代わりに、攻性対策班なるものを執筆して上げています。よろしければそちらもどうぞ。未だ、完結のかの字もない状態ですが。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

もし宜しければ、「文そのもの」の批評の方をお願いします。あつかましくありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3255s/>

---

柏市立未整理文書庫 整理班

2011年4月10日23時37分発行